花王　2040年カーボンゼロ、2050年カーボンネガティブの実現へ

国内全ロジスティクス拠点で使用電力100%再生エネルギー化を実現

花王は、脱炭素社会の実現に向け、CO_2の「リデュースイノベーション」と「リサイクルイノベーション」に取り組むことで、事業活動に伴い排出されるCO_2を2040年までにゼロ、2050年までにネガティブを目指す。

同社は2019年4月にESG戦略「Kirei Lifestyle Plan」(キレイライフスタイルプラン)を策定し、19の重点取り組みテーマを設定した。この「脱炭素」目標の達成に向けて設定した中長期目標は、国際的なイニシアチブであるSBTイニシアチブ(SBTi)から「1・5℃目標」の認証を取得しており、事業の使用電力を100%再生可能エネルギーで賄うことを目指す国際的なイニシアチブ「RE100」にも加盟している。2021年は実績の1つとして、国内の全てのロジスティクス拠点(55カ所)等で使用電力100%再生エネルギー化を達成した。

2021年は、従来の非化石証書の活用に加え、購入電力では新たに採用したコーポレートPPAの本社での活用、使用電力ではグループ最大の自家消費用太陽光発電設備の酒田工場への導入(パネル発電容量合計2845kW)など、電力の再生エネルギー化を進めた。また、国内の全てのロジスティクス拠点(55カ所)、すみだ事業場、酒田工場にて、使用電力の100%再生エネルギー化も実現している。

2022年は、昨年設定額を引き上げた社内炭素価格制度を、従来の日本に加えグローバルで採用することで、CO_2排出量の少ない設備や自家消費用太陽光発電設備の導入を進めながら、引き続き再生可能エネルギーの使用を加速していく。

ユニ・チャーム　中国の天津・江蘇工場に再生可能電力を導入

ユニ・チャームは、中国の天津工場、江蘇工場に4月中旬より再生可能電力を導入した。この再生可能電力の導入により、天津・江蘇の2工場で排出する二酸化炭素(CO_2)を年間で約9300t—CO_2削減することを目指す。

今回の再生可能電力の導入は、三菱HCキャピタルの現地子会社と「電力販売契約」(Power Purchase Agreement)を結ぶことによって実施する。対象となる工場は、尤妮佳生活用品(天津)有限公司の天津工場と、尤妮佳生活用品(江蘇)有限公司の江蘇工場としている。

天津工場

江蘇工場

この天津工場、江蘇工場の再生可能電力の導入は、海外においては、ブラジル、タイ、ベトナム、アメリカに続いて5例目となる。なお、日本国内ではユニ・チャームの伊丹工場、埼玉工場、三重工場、ユニ・チャームプロダクツの九州工場、四国工場、ペーパーレットの静岡県内3工場で導入が済んでいる。このような取り組みにより、ユニ・チャームグループの工場から排出される二酸化炭素は年間約3万7000ton—CO_2が削減できる見込みだ。

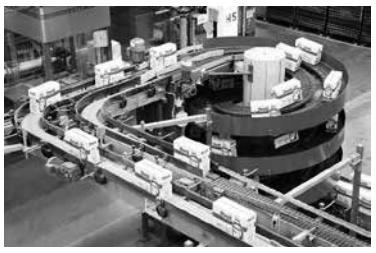
BASF　ヘンケル　再生可能炭素由来の原料に置き換え

合計で約20万トンの二酸化炭素排出を削減

BASFとヘンケルは、2021年にヘンケルの洗浄・洗剤ブランド「Love Nature」(ラブ・ネイチャー)の原料を再生可能な原料へ置き換える試験運用を成功させたことを受け、今後4年間で、ヘンケルの欧州ランドリー&ホームケア事業、ビューティーケア事業のほとんどの製品において、化石炭素由来原料の再生可能な原料への切り替えに取り組む。

この協力により、材料として使用される年間約11万トンの化石由来原料は、BASFの認証バイオマスバランス・アプローチを用いた再生可能な原料で代替されることになる。

その結果、ヘンケルの主力ブランドである「Persil」(パーシル)、「Pril」(プリル)、「Fa」(ファ)、「Schauma」(シャウマ)は、合計で約20万トンの二酸化炭素排出を削減することができるようになる。



私のH&B日記

変化

先日、インターネット上で「ギターソロ飛ばす問題」という文章を目にした。具体的に調べると、音楽を聴いていてギターだけが鳴っている箇所やイントロといわれる前奏部分などの歌唱部以外をスキップする若者が増えているという内容だった。

あくまでインターネット上で得た情報なので、真偽のほどは不確かだが、たしかに思い返すと近年のヒットしている曲は前奏部が短い、もしくは全くないという曲が多いように感じる。

この話題を見たときに私が思いだしたのは、動画配信サービス上で人気を得ていた「ファスト映画」というコンテンツだ。ファスト映画とは、特定の映画のストーリーや概要等を映画本編から主要なシーンのみを抜き出して説明し、通常であれば視聴に少なくとも1時間以上は要する映画視聴を20分ほどで完了することができる動画のことだ。映画の映像を無断で使用していたことなどから現在は削除されているが、当時はかなりの再生数を得ていたという。

話題になっていた当時、人づてにその動画が人気を博しているということを聞いて違和感を覚えた。私自身、映画鑑賞は趣味の一つで週末には何かしら視聴している。私は映画の魅力とはあくまでその映画の世界観に入り込むことで体験できるものだと考えていて、重要なシーンだけを切り取ったような動画でその体験をすることは難しいだろう。ファスト映画を楽しんでいた人たちにとってはそれで問題ないのだとしたら、そもそも映画の楽しみ方自体が変化してきているのかもしれないと感じた。

この2つの話題から考えられるのは、現在の娯楽ではより具体的で、よりわかりやすく、より気軽に楽しめるようなコンテンツが良くも悪くも好まれていく傾向にあるということだ。少し寂しいような気もするが、ゆっくり時間をかけて楽しむような娯楽は、検索すればすぐ答えを見つけることができる現代においてはマッチしなくなってきているのかもしれない。

(郡)